



Title	<紹介>三村晃功著『中世私撰集の研究』
Author(s)	寺島, 標一
Citation	語文. 1986, 47, p. 69-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68748
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔招介〕三村晃功著『中世私撰集の研究』

寺 島 樹 一

本書は中世後期から近世初期にかけて現れた一群の「私家集名を冠する」私撰集についての研究をまとめたものである。先ずここで

言うところの「私家集名を冠する」私撰集とは、例えば本書で考察の対象となっている『光俊集』や『為季集』のよう、『人麿集』

『伊勢集』など本来の私家集と同様に書名に個人名をもちながら、内実は多數の歌人の作品を収めた私撰集である歌集を意味する。

これら「私家集名を冠する」私撰集についてのまとまった研究は、著者が本書の総論で概括するように、昭和三七年・三八年の「和歌

文学研究」第一四号・第一五号を始めとする。先行の諸研究の中で

本書と特に深い繋がりをもつのは、井上宗雄氏の論文「明題和歌全集と為兼・為冬・為定集」と「立教大学日本文学」第一四号 昭和四〇年六月)である。というのは、「為兼集」「為定集」が「明題和歌全集」から「為」の字をもつ歌人の歌を主として抜いた二次的撰集である、というこの論文での井上氏の指摘を受け、著者は更にそれを訂正し、展開させて、これらの二次的撰集の典拠資料は「明題和歌全集」ではなく、「和歌題林愚抄」であったという本書の主題をなす結論に到達しているからである。

昭和五一年から五九年の比較的短い期間に集中して書かれた二〇篇の本書所収の論文を通して、読者は一つの明察が一つの発見を生み、次々と対象の問題の視野を広げてゆく、研究の展開過程を目のあたりにするだろう。

本書は既に松野陽一氏によつて丁寧な書評がなされている。「中世文学研究」第一一号)また『中世文学の世界』(和泉書院 昭和五九年)に最初に発表された第一章については、同じ「中世文学研究」第一〇号に島津忠夫氏の紹介があり、更にいた付け加えるべきことはないが、以下章を追つての紹介と若干の読後感を綴りたい。

本書は次のように五つの章から成る。

序章 中世私撰集の撰集資料―『和歌題林愚抄』から『明題和歌全集』へ

第一章 総論 中世私撰集の成立

第二章 各論 中世私撰集の成立

第三章 付論 中世私家集の成立とその周辺

終章 結語

序章は『和歌題林愚抄』(以下「題林愚抄」と『明題和歌全集』との比較を通して、後者が前者を参照し、他に『二八明題和歌集』を援用して成立した事實を論証し、次に各々の成立過程と時期を論じる。著者には既に『明題和歌全集』に関する論考や内閣文庫蔵『明題和歌全集』の翻刻があるが、『題林愚抄』を新たに視野に取り入れた本書では、前記の論考が若干修正され、新見が示される(例えば『明題和歌全集』の成立時期)。従来の文学史をより本質的な資料間の関わりを明らかにすることを再構築する、この章の論は典拠資料探索の重さを端的に教えてくれる。

次に第一章の総論では、第二章の各論で個別に考察される私撰集全般にわたる問題が先ず論じられる。一三篇の私撰集の分類、その類題和歌集としての性格、成立時期が検討され、統いて謎となつてゐる集名の問題、即ちいかなる理由で私撰集に私家集まがいの名が

付けられたのかという問題が論じられる。この点について著者は中

村幸彦氏の「擬作論」を踏まえて、私家集までいの名を冠するのは、読者の逸興を誘おうとする編者の意図的な、偽作ならぬ擬作行為によるものだ、という「擬作説」の可能性を提出する。細かな事実に裏付けを求める地道な実証に覆われた本書の中でこの擬作説は問題の私撰集の文学性を仮説によって大胆に解き明かそうとするものである。つまり単に類題和歌集という、題詠の手引書としての実用的な意味を超えて、パロディーとも言うべき営為の中に後の近世の文学に繋がる成熟した文学意識を見出そうとするのである。

この議論に関しては島津、松野兩氏とともに前掲の紹介、書評欄で疑問を呈している。そこでは類題和歌集に統一的な文学性を求める難しさが指摘されているのだが、加えて中村氏の「擬作論」で扱われた、長明、道真、西行などの伝説的な作者の擬作上の価値と、光俊、為季、為兼といった作者のそれとはそのまま同列に考え得ない困難や、擬作行為が狃り逸興の内実が問題の私撰集においていかなる性格をもつかなど、残された課題は多い。最後にこれらの私撰集の和歌史における位置についての考察が示されて章が結ばれる。

さて総論に続く第二章の各論は、本書の中心をなしており、『伯母集』『頴季集』『隆季集』『資賢集』『為季集』『光俊集』『為兼集』(前集)『為冬集』『為定集』『元可集』『義満公集』『済繼集』『邦高集』の一三篇の私撰集について個別にその撰集資料、収載歌の作者と歌の性格、成立時期とその意義や編纂目的などの点を具体的に細部にわたって周到に考察する。各論における考察の意義は、井上宗雄氏著『中世歌壇史の研究』室町前期の改訂新版中、補説「私撰集・類題集の成立」の項で本書の成果が多く採られていること一つをと

つても明らかになろう。

第二章は門外漢の筆者にとって、容易に読み通すことの出来る章ではなかった。著者が後記で断つてあるように、各々の論考が辞書の項目のように孤立して収められているため、相互の叙述の重複を避け得なかつたことがその理由の一つだが、その他に新稿の第一章の議論が、この章の各論に充分取り入れられていないことも原因がある。一例を挙げれば総論で提起された「為季集」の擬作説の可能性は、各論の「為季集」の議論では影を潜めてしまつており、とすれば章の進展とは逆に議論の後退を見る憾みがある。

第三章の付論は私家集名を冠した私撰集ではなく、本来の意味の私家集を扱う。それらは『大納言為氏卿集』『為世集』『大納言為定集』『衣笠前内大臣家集』そして『済繼集』(益田勝実氏蔵)の五篇である。これらの私家集も前章の私撰集同様『題林愚抄』や『明題和歌全集』などを撰集資料とした二次的撰集であり、その考察の方法も第二章のそれをほぼ踏襲するものである。撰集資料としての類題和歌集の他の作品への関わりが、單に私撰集に止まらず広範なものであることが示される。

終章の結語には本論のまとめと、詳細な人名、書名そして和歌索引が收められ、検索の利便が図られている。

これらの特異な一群の私撰集は、おそらくその共通資料である『題林愚抄』以下の類題和歌集の性格が明らかにされた時、より多くの意味が同時に明らかになるのだろう。その意味で著者が次に刊行を予定している『中世類題集の研究』は、本書で提出された種々の問題を解き明かしてくれること思われる。一読をお薦めします。